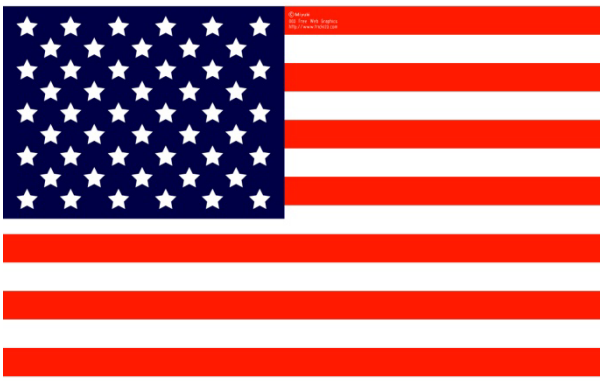
ニューヨーク日本人学校　帰国報告

札幌市立中の島小学校
小　野　博　史
２００７年派遣

Ⅰ　ニューヨーク日本人学校のある地域

１　アメリカ合衆国について



アメリカ合衆国は，本土の４８州と，飛び州のアラスカとハワイの２州，連邦直属の首都ワシントンＤ．Ｃ．から構成される。

また，準州としてプエルトリコ，アメリカ領サモア，グアム，ＵＳヴァージン諸島などがある。

北アメリカ大陸に最初に住んだ人々はアジア系のモンゴロイドである。彼らは，氷河期であったおよそ３万年前から１万年前にかけて，凍結したベーリング海を渡ってシベリアからアラスカを経由して南北アメリカ大陸各地に分散していった。こうした人々は独自の文化を育み，部族それぞれが独自の国家を形成する形で定住した。

１０世紀末ノルマン人の航海士レイフ・エリクソン率いる船団が北米へ達しアメリカ大陸を「発見」したと伝記書「サガ」に記されている。一行はニューイングランドからニューヨーク州一帯を新天地として「ヴィンランド」と名付け定住を試みたが，先住民と折り合いがつかず十年ほどで，元の入植地であるグリーンランドへと戻ったとされる。しかし，当時彼らが新大陸に達したという情報はヨーロッパ諸国ではあまり知られておらず，定住が頓挫，領有もしなかったためアメリカ大陸の「白人初の発見者」とはされず，クリストファー・コロンブスほどの正当な評価を受けていない。

なお，クリストファー・コロンブスは，北米大陸に到達した日が祝日となるなど，新大陸の発見者としての評価を得ている。

２　ニューイングランド地方について

アメリカ北東部の６州，コネチカット州・ニューハンプシャー州・バーモント州・マサチューセッツ州・メイン州・ロードアイランド州を指す。

アメリカ合衆国で最も古い地域であり，１６１６年イギリスで入植者が募集されたのが地域名の由来。１６２０年からイギリスのピューリタンがマサチューセッツへ移住を始め，各植民地を設立していった。

ピューリタンがメイフラワー２世号で到達，定住した場所プリマスは，アメリカ生誕の地として，多くのアメリカ人が訪れる場所である。

ニューヨーク日本人学校は，ニューイングランド地方のコネチカット州グリニッチにある。グリニッチは，ニューヨーク州に隣接した町で，アメリカ東海岸でも５本の指に入る豊かな町であ

る。

３　アメリカ人からみた日本・アメリカの中の日本

アメリカで日本と言えば，自動車や電化製品などの工業製品，寿司，アニメが有名である。寿司は，アメリカ流に手を加えた寿司が大抵のスーパーマーケットで手に入れられる他，タイ料理店や韓国焼き肉店などアジア料理のレストランやＢＵＦＦＥＴ（バフェと発音）にも置いてあるほど身近な食べ物ある。また，道路を走る車両も日本車の割合がかなり高い。

しかし，日本の場所などはよくわかっていないアメリカ人も多く，西海岸での日本の印象ほどは身近な国とはいえないようである。

Ⅱ　ニューヨーク日本人学校

１　歴史

１９７５年にニューヨーク州クイーンズにて開校。北米で最も古い日本人学校である。その後，児童・生徒数の増加により，１９９２年にニューヨーク州の北に隣接するコネチカット州，グリニッチに移転した。２００６年度から，ウェストチェスター・フェアフィールド・ヒブル・アカデミー（ＷＦＨＡ）校に校地を売却し，リースバックして校舎を借用，キャンパスシェアを行っている。

２　教育課程

教育法人「ニューヨーク日本人教育審議会」（ＪＥＩ）が設置した全日制の日本人学校であり，日本の文部科学省及びニューヨーク州，コネチカット州の認可条件による教育水準に基づく私立学校である。したがって，日本の学習指導要領に準拠した教育課程が行われている。

ニューヨーク日本人学校は，小学校１年生から中学校３年生までが在籍する小中併置校である。中等部では中学１年生を７年生，３年生を９年生と呼び，相互に交流をもつ。

各学年とも，週３１．５時間の授業時数をもち，登校時刻・下校時刻ともに同じである。これは，全児童生徒がスクールバスで登下校をしなくてはならないというタウンとの取り決めの影響である。

①　教科学習

日本の学習指導要領に準拠していることから，基本的には日本国内と同様である。

教材は，国内調達，日本からの取り寄せで基本的に不自由しないが，生物教材は，確保が困難な場合がある。生物については，チャイナタウンや南部料理の店で食材として売られているもの。植物は，前年度からの引継ぎや伝えられている情報をもとに調達することができる。多少の苦労はあるが，日本国内と同程度の教材をそろえることができる。

②　特色のある教科

英語・・・・初等部では週４時間，中等部では，帰国後を考慮し文法を加えた週５時間が確

保されている。授業は，すべて現地スタッフによって英語のみで行われている。

なお，クラスは習熟度別に学年２～３レベルで構成される。レベルはおよそ滞在年数に比例している。

初等部においては，音声を中心に授業が進められているが，英語科では英語力を高めるためにはリーディングがもっとも重要であるとして，長期休業中はリーディングを中心に課題が出される。

ＡＲＴ・・・現地スタッフによって，すべて英語で授業が進められる。

英語の取得状況により指示の理解に差異が見られるが，滞在年数の長い子どものサポートと指示のわかりやすさから全員が楽しんで授業を受けている。

米国社会科・英語の話せる日本人の現地スタッフによって行われる。基本は，英語で授業を行う。

現地の公立学校で使う教科書を使い，１，２年生は，生活科の一部で行われる。

１年生・・・地域の生活，買い物
２年生・・・世界の国々・人々
３年生・・・アメリカの歴史（ネイティブアメリカン）
４年生・・・グリニッチの歴史
５年生・・・アメリカ５０州
６年生・・・政治・歴代大統領

③　校外学習

多様な体験を大切にするため，各学年学習に応じた移動教室を実施している。

１年生・・・近隣の公園（３回），商店街（Greenwich Ave），隣町のネイチャーセンター，マクドナルド
２年生・・・商店街（Greenwich Ave）３回，水族館，子ども博物館
３年生・・・ＮＹ自然史博物館＆セントラルパーク，農場＆開拓記念村，商店街（Greenwich Ave），警察署＆消防署，スーパーマーケット
４年生・・・町内の史跡（２回），ごみ博物館
５年生・・・宿泊学習（２泊３日ＮＹ州校外フロストバレー），ＮＨＫ（マンハッタン）
６年生・・・修学旅行（２泊３日ボストン），MoMa
７年生・・・宿泊学習（２泊３日フィラデルフィア）
８年生・・・修学旅行（３泊４日ワシントンＤ．Ｃ.），イサムノグチ記念館
９年生・・・ＮＹ自然史博物館

基本的には，日本の校外学習に準じた場所を訪問する。しかし，教科書で書かれているものと同様の工夫や苦労，考え方を聞き取ることは難しく，日米の違いに触れる校外学習となることも多い。

④　学校間交流

毎年，定例で交流を行う。

（１）KING 校

隣町にある私立小学校。初等部各学年が交流を行う。

コネチカットでは，小学校は５年生まで（州によっては６年間の週もある。）のため，５・６年生のみ合同で交流している。６年生については，ミドルスクールとの交流を検討している。

また，毎年ホームステイプログラムを実施している。

（２）ウィットビースクール

町内にある私立中学校。中等部７，８年生が交流を行う。

（３）町内公立中学校

イースタンミドル・セントラルミドル・ウェスタンミドルの３校と，中等部のサッカー交流，バスケット交流を行っている。戦績は，芳しいものではないが，校内をまとめる意味でも，現地理解という意味でも有用な交流である。今後は，学校間交流も検討されている。

（４）ＷＦＨＡ校

ニューヨーク日本人学校の校舎のオーナー，キャンパスシェアをしている。もともと，ニューヨーク日本人学校が所有していたものを売却した関係で，心情的なしこりが日本人学校側に残っていたが，年数を経て関係は良くなってきている。

互いの国の伝統行事に招待したり，ＡＲＴ科の授業を共同で行ったりするなど，近年では交流が始まっている。

（５）その他

時折，飛び込みで交流を求めてくる学校があるものの，対応をし切れていないのが現状。予算や安全管理を鑑みて実現は難しい場合が多い。

⑤　進路指導

中等部卒業を機に帰国する生徒が多く，一人当たりの受験校も３～５校程度で，進路指導担当者は推薦書記入，日本との連絡の時期は深夜までの仕事が続く。特に，日本との時差が１３時間～１４時間（サマータイムによる）あり，電話での連絡は，アメリカ時間深夜になることも多い。

学校でも，相応の進路情報を有するが，子どもたちは，塾の持つデータも鑑みながら受験対策を進めている。なお，帰国先は，東京，神奈川など首都圏が大半である。

なお，アメリカでのハイスクール進学は，町内のグリニッチハイスクールか，近隣の慶応ニューヨーク学院への進学が多い。ハイスクール進学の場合，９年生１学期で退学し，９月よりハイスクールに入学する。

⑦　特別支援教育

ニューヨーク日本人学校は，特別支援学級が設置されており，私の在任期間中は２～５名の児童生徒が在籍していた。指導には，派遣教員２名，現地スタッフの特別支援コーディネーター１名，副担任としてもう１名がかかわっている。

さらに，校地内にニューヨーク地区の教育相談室が併置されており，ニューヨーク州スクールサイコロジストら２名で，地域に住む支援の必要な児童生徒に対している。ここと協力

して校内の支援を要する児童生徒への支援を行ったり，教員の研修を行っている。

また，広汎性発達障害をもつ児童生徒の支援のため，特別支援コーディネーターや教務主任が取り出し授業を担当している。

近年は，手厚い対応が功を奏し，多くの発達障害をもつ児童生徒が入学してくるようになり，今後の対応の仕方に検討が必要となっている。

アメリカの特別支援教育は，町の認定を受けると成人するまで，手厚い支援を受けることができる。ＩＥＰとよばれるカルテのようなものを標準フォーマットでもっており，国中どこへ転居しても同様のサービスを受けることができる。ニューヨーク日本人学校でも，校内ＩＥＰを作成して，情報の共有化を図っている。

なお，発達障害の認定は，町の経済的な負担があり，リーマンショック以降は，なかなか認定されにくくなってきている。

⑧　多様なゲストティーチャー

宇宙飛行士野口聡一氏，前千葉ロッテマリーンズ監督ボビーバレンタイン氏，前内閣総理大臣夫人鳩山幸様，前ニューヨークヤンキース外野手松井秀喜氏，など地域や日本にかかわる多くの方に触れる機会がある。だれもが知る，本物に出会える場所。それがニューヨーク日本人学校である。

また，米国社会科の政治の授業では，コネチカット州の上院議員に実施に来校していただく。８年生修学旅行では，一般人ではアメリカ人であっても入ることのできないホワイトハウス内部に入ることができる。

３　地域貢献

バブル期，ニューヨーク地区は多くの日本人が，多くの不動産投資や経済活動を行った。また，地域にも多くの日本人が流入し，住民と軋轢を起こしたこともあった。ニューヨーク日本人学校が移転したのもそんな時期で，道路事情などの理由で多くの制限を設けられているが，裏側には反日感情も垣間見ることができた。

その動きは，バブル以前から当地に暮らす日本人にも影響を及ぼし，永住の日本人や駐在員，そして日本人学校の児童生徒のため多くの地域貢献が行われるようになった。

①　ＰＴＡ文化フェスティバル

ニューヨーク日本人学校を会場に，ＰＴＡが主体となって行う。主に生け花，着付け，茶道，武道などのアトラクション（教員・配偶者の会・慶応ニューヨーク学院生徒）の他，物販ブース（ＰＴＡ）がある。

近隣の住人や日本人が訪れる。

②　墓参会

５月最終週のメモリアルデーにクイーンズ地区にある日系人墓地にて行われる。

全派遣教員および家族参加。

③　セプテンバーフェスト

９月に行う町の祭り。子どもによるアトラクション（ＹＯＳＡＫＯＩソーラン），Japanese バザーが中心。昨年度はリーマンショック後の不景気により規模が縮小されて文化紹介のみとなった。

④　桜祭り

近隣の町，ホワイトプレインズで行われる。折り紙や着付け，習字をブースの運営。また，フェアフィールドカウンティーの桜祭りには，搬入等の協力を行う。

⑤　タウンワイドクリーンアップ

春・秋の２回，町を挙げての清掃日が設定されており，学校として参加している。

⑥　日本語教室

町の無料教室で日本語を教える。(英語を使って)，同様にＥＳＬの講座も催されており，日本人配偶者や派遣教員もお世話になっている。日本語教室については，リーマンショック以降開催されていない。

⑦　かるみあ

町に住む日本人の会。お世話になっている町にボランティアで貢献しようとする趣旨で結成されている。活動は多岐にわたる。近年，もっとも人数の多い現地公立学校に通う駐在員家庭の参加率が悪く，活動を見直している。

⑧　はなみずき

派遣教員配偶者の会。現地の学校への文化紹介など多くのボランティアを抱える。会長は校長配偶者。

⑨　交流センター

ニューヨーク日本人学校内にある施設。在住の日本人への文化的な支援や永住日本人の社交場ともなっている。配偶者のうち比較的自由に活動のできる，子どものいない配偶者を中心にボランティア活動や文化教室を行っている。

Ⅲ．日本人環境

ニューヨーク地区には，１０万人を越える日本人が居住している。ニューヨーク日本人学校は，最大でも定員は２００名。大半の児童生徒は，アメリカの学校に通わなければならない。

また，アメリカに住むということで，あえて英語環境に身をおくことを選ぶ家庭も多く，ニューヨーク日本人学校の児童生徒数１６０名に対して，近隣の補習校は，１０００人を越える児童

生徒数になっている。

それだけ，多くの日本人を抱えているので，日系スーパーも充実しており，日本の商品も日本と同程度かやや高い程度で入手できる。また，人気番組のＤＶＤは容易に入手できるほかテレビジャパンもケーブルテレビで視聴可能である。（有料）

現地公立校にも，多くの日本人が在籍している。日本人同士で過ごすことがほとんどで，英語環境の割にはストレスが少ない状態で過ごすことができる反面，現地の学校に行っても英語をしゃべれるようにならないなどの問題も起きている。

現地公立校には，日本人学校に在籍していたことがある児童生徒も多く（保護者が，アメリカ生活慣らすためにいったん入学する。友人関係を確保するために，いったん入学するなど），子どもたちや保護者同士では，学校間の垣根は存在しない。

Ⅳ　課題

１　児童生徒確保

私立学校として授業料で運営する日本人学校には，児童生徒数確保は重要な問題である。２００名の定員に対しておよそ８０％の児童生徒数の現在は児童生徒をいかに確保していくかが経営上の課題である。

若年の駐在員が増え，学齢児童生徒数が減少している，初等部においても低学年児童が多い状況からも企業の経費節減傾向が見え，リーマンショック以降はより顕著になっている。

ニューヨーク日本人学校では，教育上の特色や日本語環境，また，英語にも力をいれ，児童生徒数の回復に努めている。

さまざまな，手立てを講じるが，もっとも有効な手立ては，魅力ある学校経営であり，魅力ある授業作りである。

２　個の学力保障

広汎性発達障害をかかえる児童生徒がまず戸惑うのは，英語環境であり，言語環境の統一が大切であるといわれる。よって，いったん現地公立校に入学しながら，不適応を起こし入学してくるケースが増えている。手厚い支援が功を奏し，児童生徒数増には貢献しいているが，人的部分では限界が近い。

また，各教室の運営をはじめ，成績上位の子どもたちの学びのために発展的な学習も取り組む必要があり，二極化しつつある学力のなかでの授業のあり方を考えていかなくてはならない。

３　キャンパスシェア

ＷＦＨＡ校との交流は軌道に乗ってきたが，施設的な部分では駆け引きが多く，年々使える部分が減少している。また，移転が前提の売却であったため，地域に移転の情報が絶えず，児童生徒確保の妨げにもなっている。

売却当初の計画よりは，移転は先に伸びそうだが，学習環境の確保という意味では，岐路に立っている。

４　組織

初等部・中等部・進路・管理職・事務室・現地スタッフと勤務形態や考え方に違いが多いため，現状を「変える」ためには大きな労力が必要。

現状で行くことが前提で，会議を行いやすいよう簡素化されており，多面的に考えていくことのできる組織ではなくなっていた。時間はかかるが，吟味された提案が行われるよう会議の持ち方を変え，ＰＤＣＡのマネージメントサイクルが機能するようにしていかなくてはならない。

５　年次意識

派遣一年目は，学校や地域のことに疎く，先輩の手助けを必要とする。であれば，学校や地域を熟知した派遣三年目がもっとも働かなくてはならない。広くものを考え，学校に良いことは取り入れていかなくてはならない。

国内において，なべぶた型が指摘されている学校組織であるが，校長の派遣年次によっては，なべぶた型にさえならないことも考えられ，過剰な年次意識は，下の年次の意欲を削ぐばかりか，学校組織をも壊していく。

年次意識を超え，自分の現状を意識しながら，子どものために派遣されている大原則を忘れずに職務にあたらなければならない。

Ⅴ　最後に

勤務中に一番覚えた言語は，スペイン語であった。これは，掃除に来るカストディアンたちの母語であり，彼らとの交流はとても楽しいものであった。

また，ガソリンスタンドであれ，マンハッタンであれ，よく道を聞かれた。どう見ても東洋人の私が・・・である。

アメリカには，実に多くの人種がいる，正直，大きくてこわもてのアフリカンアメリカンに近寄りがたいものも持っていたが，彼らに親切にされたことも数多い。

アメリカには，住んでいて本当に心地の良い挨拶がある。アメリカの隣人たちは，困っていると無条件に助けてくれる。アメリカ人は，実に表情豊かである。アメリカ人は，すぐに話しかけてくる。

ここには，日本のなくしてしまったものがたくさんあるような気がする。銃声ひとつ聞くこともなく，危険な目にもあわなかった３年間。アメリカを１００倍好きになって帰ってくることができた。

そして，帰国。担任した２つの学年。ひと教科だけ教えたふたつの学年。かれらからたくさんのカードをもらった。きっと，彼らの海外での学びには一役買うことができたのだろうと思う。

子どもと保護者の笑顔，日本でも在外教育施設でも大切なものは変わらない。